第46回太宰府市民文化祭を開催します

ページID 35014

問い合わせ　文化学習課　文化学習係　☎(921)2101

ステージでは楽器演奏やダンスなど幅広い年代の方が出演する発表会、館内では書や絵画など素敵な作品が並びます。ぜひお越しください。詳細はホームページをご覧ください。

日　時　11月2日㈰・3日（月・祝）　午前10時～午後4時（予定）

場　所　プラム・カルコア太宰府（中央公民館）

ステージの部

※終了時間は予定です。

2日㈰

午前10時30分～午後4時／出演団体35組

3日（月・祝）

正午～午後3時30分／出演団体21組

昨年のステージの部の様子

展示の部

出展15団体

＜体験会＞

ミニ盆栽（有料・数量限定）
万葉かるた

昨年の展示の部の様子

その他

4F多目的ホールにて
各種体験会（予定）

太宰府の文華～公文書館だより～ 138

近世紀行にみる太宰府
―清源院軌子の旅―

ページID：7241

太宰府天満宮の絵馬堂に「仰高」と書かれた大きな扁額が掲げられています。「仰高」には「徳の高い人を敬い慕う」という意味があります。これは宝暦14（1764）年に奉納されたものですが、19年後の天明3（1783）年4月4日、天満宮に参詣し、この扁額に目を留めた一人の女性がいます。

清源院軌子（1725―94）、名君と名高い熊本藩主細川重賢の妹です。21歳の時宇土藩五代藩主細川興里に嫁ぐも、わずか10ヶ月で夫と死別し、髪を下ろして清源院と称されました。その後和歌や文学に親しみながら、江戸の屋敷で静かに暮らしていた軌子でしたが、天明2（1782）年8月、肥後国熊本へと旅をすることになりました。国元である肥後を訪れることは以前からの希望でした。兄の参勤交代に合わせてようやく熊本行きが許可された時、軌子は57歳になっていました。

彼女が著した2編の紀行文『海辺の秋色』と『青葉の山路』は、この旅の往路と復路の記録です。人生のほとんどを江戸で過ごした軌子にとって初めての、そして最後の遠方への旅でした。その貴重な日々を惜しむように、江戸へと帰る復路では驚くほど精力的に動き回り、道中の名所旧跡を数多く訪れています。山道を歩き、船に乗り、京の名所を巡り、伊勢参宮を果たし、往路の東海道とは道を変え、中山道を通っての江戸入り。忙しくも充実した57日間の旅でした。

宰府の天満宮を訪れたのは復路4日目のことです。早朝に松崎宿（現在の小郡市）を発ち、徒歩で山道を行き、午後には天満宮へ到着しました。そこで「仰高」の扁額を見て、この額と祭神菅公の名を詠み込んだ和歌を奉納しています。

天満る其名を世々に諸人の
仰ぐも高き神のみやしろ

筑前国内で彼女がわざわざ立ち寄ったのは、天満宮だけです。名所であることはもちろんですが、文事を好む軌子にとって、菅公を祀る天満宮への参詣は欠くことができないものでした。忘れられない旅の思い出の一つとなったことでしょう。

太宰府市公文書館　荻野　寛美